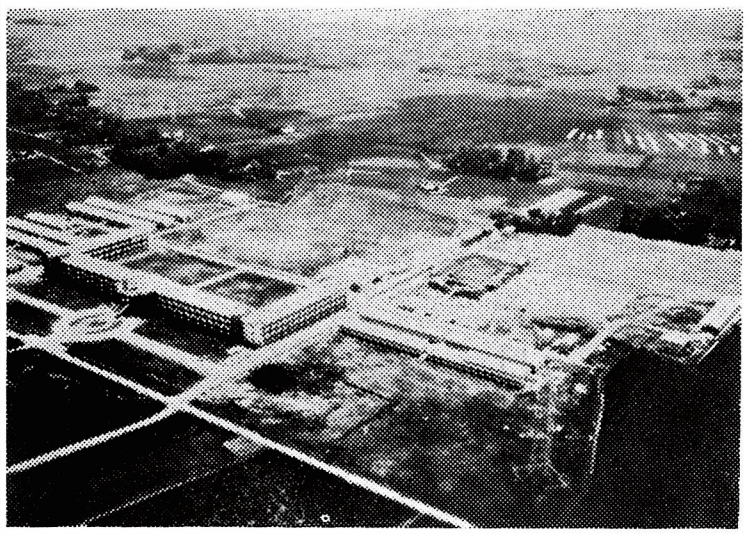
日本工業大学通信

発行所
日本工業大学広報部
埼玉県南埼玉郡宮代町
郵便番号345
電話　04803（2）3251

紙面紹介

一面　開学四周年を迎えて、日本工業大学沿革、開学の辞、開学式によせて、日本工業大学に期待する
二面　順調だった就職、卒業研究たけなわ、施設計画の展望、体育施設完成にことよせて、校旗と校歌制定さる
三面　ヨーロッパの地場産業、鶴見君帰国・教育実習終る
四面　ネパール行、『自由』ゼミに参加しよう、岐路に立つ科学・技術

開学4周年を迎えて



日本工業大学沿革

昭和40年10月1日　「大学設置事務局」開局、職員次の通り。
〈参与〉大木吉甫、稲葉　実、庄司大造、片倉竜夫、古川　光、
〈事務局長〉窪田宗英
〈第1部〉大川陽康、中道一郎、小笠原朗憲、野口桂介、竹内淳彦、荒井功男、山路親信、吉田輝男、佐藤和夫
〈第2部〉仲嶋正之、筒井　弘、滝田　厳、榊原政忠、藤原　司、小野幹郎、松田啓之輔、小室武二郎、落合次郎、板倉是好
〈第3部〉日上義雄、板垣俊春、大橋　正、神谷一夫、大野正照、筒井　圭
昭和41年1月30日　かねて交渉中の埼玉県鷲宮町関係より強力な誘致を受け、2月10日に至り、再び大学用地を鷲宮とする。
昭和41年4月30日　鷲宮町大学用地、一部地主の反対により不調となり、埼玉県宮代町所在六万坪の用地を東武鉄道株式会社より購入することに決定。
昭和41年8月10日　第一回設立準備委員会。会員は次の通り。
〈委員長〉橋本宇一
〈委員〉吉田　衛、平野智治、藤岡通夫、大原儀作、藤本盛久、大木吉甫、窪田宗英、大川陽康、仲嶋正之、日上義雄
昭和41年8月16日　東武鉄道株式会社と用地購入契約完了。これより先、大学設置申請にともなう諸準備作業開始。
昭和41年9月27日　東京都学事部現地視察。
昭和41年9月30日　文部省へすべての大学設置申請書類の提出完了。これより先、東北大学教授・同選鉱製錬研究所長・工学博士小野建二氏学長就任を承諾。
昭和41年10月1日　大学校舎の第一期工事着工。鉄筋コンクリート造3階建、延六四九六・九八㎡中の二七二一・九八四㎡の工事・施工は株式会社熊谷組。
昭和41年11月7日「大学設置審議」現地審査。（永井審議官・片山・古沢両事務官）
昭和41年　11月24日　（私大審議会）（米田審議官）現地審査。
昭和42年3月15日　「大学設置審議会」、並びに「私立大学設置審議会」より、日本工業大学設置について答申さる。
これより先、昨年12月18日及び1月23日の2回にわたり、校舎建築工事の遅延理由にて保留となる。
昭和42年3月25日　文部大臣より学校法人斎藤行為の変更、及び日本工業大学設置が認可される。設置学科並びに定員は、機械工学科80人、電気工学科80人、建築学科80人。
昭和42年3月30日　かねて建設中の大学校舎第一期工事二七二一㎡並びにブロック造平屋受電所四八・六㎡完成、引続き第一期工事と平行して着工中の第二期工事三七七四・六七五㎡の工事を続行。施工は㈱熊谷組。
昭和42年4月22日　日本工業大学開学、入学式を行なう。
（第一回入学生、三三一名。うち、三三〇名は工業高校の卒業生で、本学の理想とする大学工学部入学者は、入学前において、工業に関する予備知識・技術を持たなければならないという主張と、工業高高等学校と工業大学とを一貫した七年制の〝高級技術者〟の育成を目的とし、開放経済に対応した、独創性のある人材教育がスタートすることになった。尚、東京工業高等学校よりの本年度日本工業大学進学者は、現役・浪人合わせて二三七名であった。）
昭和42年5月22日　かねて募集停止中の東京高等工科学校を再開高等学校普通科卒業生が、日本工業大学へ進学するための専門的予備知識を与えるために、一年間、午後三時より午後九時まで授業の「日本工業大学進学コース」を開設した。
昭和42年5月22日　日本工業大学第二期工事上棟式を行なう。
昭和42年8月31日　日本工業大学第二期工事完工。
昭和42年9月30日　昭和42年2月15日から着工されてM4・M5の実験棟（いずれも四〇七㎡）が完工。鉄骨ブロック造波形スレート葺平屋建。設計施工は東京工業高校。
昭和42年12月10日　日本工業大学後援会設立、初代会長に伊藤武平氏就任。
昭和43年10月21日　日本工業大学校舎第三期工事着工。鉄筋コンクリート造3階建、二六八四・七八㎡。施工は㈱熊谷組。
昭和43年11月20日　A2の実験棟完工。四七五㎡、設計施工は東

（三面に続く）

開学の辞

日本工業大学工学博士　小野健二

本学を開設するに当り、多大の尽力をよせられた方々、並びに、今後も本学の発展のために御協力を頂かねばならない方々を、来る十一月二十一日に多数招待して、開学式を行うに至ったことは、全職員並びに全学生と共に喜びに堪えない所である。

顧みるに、終戦後、新学制が発布されてから、国民の教育に対する関心が次第にたかまり、各々その能力に応じて高等教育を受けようと志す青少年が、年々増加し続けている。これがために、普通高校は大学進学のための受験教育に歪められると共に、年少にして工業をめざし、工業高校に学ぶ者の中から、更に高度の工業教育を受けようと志す者にとって、在来の大学工学部に進学することは至難な状態におかれていた。よって、全国工業高校長協会は、しばしば当局に対し工業高校卒業生を対象とする工業大学の設置を要望したが、その希望は容易に容れられることもなく時日が経過した。

しかし、その切実な願いは漸く実る時が到来した。

学校法人東工学園は、明治四十年以来の工業教育に尽くした名門校の責任を果たすために、昭和四十年に大学設置事務局を設置し、窪田常務理事が事務局長となり、大川現教務部長が第一部、仲嶋現総務部長が第二部、日上教授が第三部の部長となり、鋭意設立準備に専心した。また、東工学園の後援会も大学設置協賛会を作り、側面より協力し、約二万の会員を擁する同窓会も同じく、協賛会を作りこれに協力された。

一方、本学の主旨に賛同された個人並びに諸会社からは多大の資金援助がなされた。

昭和四十一年二月、埼玉県鷲宮町関係よりの強力な誘致が行われ、ほぼ大学用地が同町に決定を見るかにみえたが、一部地主の反対により不調に終り、同年四月、静かなる文化的都市建設を標榜される斎藤現宮代町長の誘致により、現在地に六万坪の大学用地を東武鉄道株式会社より購入することに決定し、作業は軌道に乗り出すことになった。本学の現在地にあるは、偏えに同町長と町民の並々ならぬ尽力と協力の賜物である。

同年五月、科学技術庁金属材料研究所長・橋本宇一理博が法人顧問となり、平野教授・吉田教授・藤岡教授・長谷川教授・宗宮教授・大原教授等が専ら教員組織の充当に尽力せられた。本学が第一級の人材を集め、国立大学に劣らぬ教員組織を擁するのも、これらの教授の力に負う所、多大である。

かつて、同年九月、私が現在地を視察した時は、黄金波打つ実りの秋で、大学の影すら認めることができなかったが、十一月初め株式会社熊谷組によって第一期工事が着工され、昼夜兼行の作業努力にもかかわらず、同年十二月・翌年一月の二回にわたり、本会建築工事の遅延理由により認可保留となった。この間、大学設置審議会の方々に度々協力を依頼し、昭和四十二年三月二十五日、文部大臣より大学設置が正式に認可されたので、四月二十二日、最初の入学式を挙行することができた。

この間の労苦は言語に絶するものであるけれども、本学の理想とする工業に関する予備知識・技能を身につけた青年に、より深遠なる工学知識を授け、実務能力と創造性に富む科学技術者の育成にスタートがきられたのである。

その後、校舎の第二期・第三期第四期工事が完成、最近は株式会社巴組鉄工所の協力により実験棟・体育館などの建設も急速に進行し、あわせて実験設備等の充実へと初期の企画の過半を整備するに至った。一方、本学の象徴とも言うべき校旗を定め、校歌を制定して、永遠に栄えるべき基礎を固めることができた。

明年三月、新しい思索によって打ちたてられた新技術者育成の成果として、第一回生を社会に送り出すこととなったので、この機会に、今日まで本学開設のための約六ヶ年にわたり、陰となり、日向となって御協力頂いた幾多の諸兄に、深甚の謝意を表すると共に、今後一層の御援助と御指導とをお願いする次第である。

我が全職員は、常に初心に帰り、本学の理想を達成するために更に努力を重ねると共に、教育と研究を通して世界の文化に貢献することを、深く心に刻むべきだ。

学生諸君もこの機会に改めて本学に学び得ることの誇りを堅持し自らを鍛え、学成りて社会に出ては一道を照らす灯たらんことを切望し開学の辞とする

日本工業大学に期待する

全国工業高等学校長協会理事長
都立足立工業高等学校校長　長島泰明

日本精工株式会社
取締役社長　今里広記

豊かな人間性と生きた学問

貴校開設以来、早や三年有余、ここに第一回卒業生を産業社会に送り出されることになり、かつ、この十一月二十一日には盛大な開学式典が挙行される運びになりましたことは、慶賀に絶えず衷心よりお祝い申し上げます。

わが国工業教育の先達として、東工学園創立以来、子弟の教育を通じて産業社会に貢献されてきた貴学園の輝かしい歴史の上に、更に画期的な一頁を書き加えられました。今や、わが国は世界有数の工業国として発展し、今日人類に課せられている技術の高度化と人間の福祉との調和をはかりつつ、わが国の産業を発展せしめる社会的使命こそ、貴校の諸先生ならびに学生諸君の双肩に懸っているところであると信じます。

貴校の建学の精神が、単に技術者のみを育成するだけでなく、広く豊かな人間性をもあわせもった、生きた学問の研鑽を目標とされておられることは、全く同感であるところであり、このような理想のもとに教育を受けた若人が次代の日本を担って行かれるだろうことは、疑う余地がございません。

最後に、立派な建学の理想と精神を忘れずに、日本工業大学の発展と名誉のために、ひいてはわが国工業の躍進のために、御活躍されることを期待します。

（長島　泰明）

二十一世紀の指導者たれ

四年前、本学が特に工業高等学校卒業者を対象として高等教育を行ない、適性・能力の深化を図り産業社会の指導者として送り出すという理想のもとに開学され、近く第一回生が卒業する運びに至りました。年と共に本学の理想は、理解と共鳴を得、入学志願者も激増しつつあることは喜ばしいことと存じます。

工業高校卒業生は高校時代の学習について普通教科、科目の時間数の少ないことから、基礎学力の不足という現実もあります。

一面、目的観がしっかりしており、卒業後は必ずやその精神面・実技面で社会の注目する成果をあげることは必定であります。

ことに、大学のあり方が論議されている時、本学のような新しい教育理念は今後の大学教育の行方を大きく示唆するものといえる。

来春卒業の諸君が四年間の本学の教育理念を充分に身につけ、工業技術者として二十一世に近づくわが国の工業界の輝ける指導者として活躍され、後輩学生諸君のよき先達になって頂きたいものだと念願しております。

（今里　広記）

開学式によせて

東工学園理事長　大木喜福

本学設置に際し、御尽力を賜わった各位の皆様のお陰をもち、四周年目の開学式を挙行するに至りましたことは、誠に喜ばしいことでございます。

顧みますと、今から三年半前、本学はこの宮代の町に誕生したのでした。

さて、今から六十数年前、明治四〇年の十一月に現在の東工学園の母体である東京工科学校が神田に創立して以来、大震災、戦災に遭うなどいろいろな災害を蒙りながらも発展の一途辿ることができました。

戦後は日本の諸工業の復興に伴い、工業高校卒業生の職場は急激に拡大し、産業界の各方面からの求人が殺到するようになりましたが、産業界の各方面でご活躍中の卒業生の方々から「東工にもぜひ大学が欲しい、産業界の要望はもうそこまできているのだ」というまことに母校愛に満ちたご忠言、ご助言を戴くに及び、設立の数年前より東工学園として工業大学を持つこの是非を研究、検討してきたのであります。

ときあたかも日本の経済成長はめざましく、経済大国として世界の産業界に雄飛する日が近づいておりました。工業大学卒業生はますます職場に求められるようになり、日本工業大学設立の機は熟し、東工学園のそれまでの着実な歩み、堅実な実績が実業界から大いに認められ、本学が誕生したのであります。

本学建学の基本精神は、東京工業高校卒業生を始めとして、全国の工業高校卒業生に進学の機会を与えることにより、工業高校、大学と七年間の一貫教育をする点にあります。これは、教育界に先駆ける試みであり、私はこの試みは正しかったと思っております。建学以来、本学設立のこの理念を生かし、さらに具象化すべく多大のご努力とご協力を戴いております学長、教員各位、職員の方々に対し改めて敬意を表する次第です。本学の発展はむしろこれからであります。この建学の理念を生かすべく、私も皆さまのお力を得て、今後ますます経営上の努力をいたす所存です。

順調だった就職

完成年次をむかえた本年度の求職活動は、立ち上がりこそつまずいた感があったが、夏季休暇を前後して急速な進展をみた。

今年の求人件数は、九月十七日現在で六五九件である。

内定者数は、11月1日現在、求職者中の九十五%である。

しかし、未内定者の中には、就職したいという意志表示をする者が少なく、これらを除けばほぼ内定していると見ることもできる。

次に掲載するのは、今年の内定先の会社である。

日本ナショナル金銭登録機㈱、㈱日立製作所、古河鉱業㈱、焼結金属工業㈱、リオン㈱、椿本興業㈱、島津理化器械㈱、安藤建設㈱、㈱巴組鉄工所、㈱小川建設、㈱熊谷組、緑屋電気㈱、松井建設㈱、㈱日本起重機製作所、日産プリンス東京販売㈱、第一電子工業㈱、菱電サービス㈱、㈱渋谷商会、大成温調工業㈱、黒田精工㈱、五洋建設㈱、浜井産業㈱、東光電気工事㈱、オルガノ㈱、日本精工㈱、キッコーマン醤油㈱、ボード㈱、日建設備㈱、日建道路㈱、鉄建建設㈱、安藤建設㈱、大成建設㈱、小林住宅産業㈱、竹中土木㈱、日立電子サービス㈱、㈱城口研究所、㈱渡辺建築事務所、㈱構造計画研究所、川崎電機工業㈱、コーシン・ラシン㈱、安川商事㈱、中川電機㈱、武蔵㈱、殖産住宅相互㈱、東京ラヂエーター製造㈱、㈱地崎組、㈱増岡組、三和エレクトロニクス㈱、富士計器㈱、㈱浅川組、中山鋼業㈱、日本国有鉄道関東支社、旭産商㈱、岩田塗装機工業㈱、芝電気測器㈱、㈱富野鉄工所、日本ワイパブレード㈱、㈱日本STジョンソン商会、日成ビルド工業㈱、池貝鉄工㈱、㈱明光商会、東洋ホーチスエレベータ㈱、日下部ワンソン㈱、㈱聚楽、日鉄工業㈱、大森精工機㈱、㈱三興、タマチ電機㈱、コロナモーター㈱、東洋堤頭㈱、ミサワホーム㈱、金属工業㈱、㈱鈴木鉄工所・川鉄備工業㈱・アイコク工業㈱・日本電波㈱、無線テレビ工業㈱昭和製袋工業㈱、ペトリカメラ㈱、碌々産業㈱、鈴木シャッター工業㈱、㈱サン電業社、前沢化学工業㈱、日本科学技術研修所電子計算機センター、小松フォークリフト㈱、タイキングループ大基、㈱写真植学機研究所、埼玉機器㈱、三英電業㈱、栃木富士産業㈱、㈱森幸製作所、東京測範㈱、㈱園池製作所、芝電気測器㈱、野村精機㈱、東京プロンティア㈱、スターテング工業㈱、巴工業㈱、高千穂工業㈱、東邦シートフレーム㈱、日立精工㈱、東陽工業㈱、㈱山光社、埼玉機器㈱、㈱日立製作所、前沢バルブ工業㈱、アンテナ技研㈱、東栄電気工業㈱芝通信工業㈱、品川通信工業㈱、柳沢製作所㈱、㈱大興電機製作所㈱地崎電機製造所、㈱キングストン、㈱カトウ設計事務所、鋼板剪断機械㈱、新橋石油㈱、桜測機㈱、関東工機㈱、スタンレー電機㈱、前沢鉄工、日本機器鋼業㈱、㈱宮地鉄工所、大和ハウス工業㈱、島藤建設工業㈱、㈱成田屋工務店、㈱持田建築設計事務所、バウ建設㈱、長谷川建築事務所、㈱大塚商会、兼松エレクトロニクス㈱

概標

就職活動は文字通り初めての経験であったにもかかわらず、現在までに、求職を希望した学生がほとんど内定した、ということは非常に意義深いものだ。

今までの就職活動を全般的にかえりみて、反省させられる点がないでもない。

学年始めから、自分の進路を決めていた学生は、ほんの少数であった。このことが、自分が就職する場合に、不利な条件になることを知る必要がある。

日本リクルートセンターの調査によると、民間会社の採用募集開始時は、四月・五月に集中していて、選考時は六月がピークになっている。

本学への求人件数も、ほぼこの線にそって表われている。

以上のことをふまえるならば、進路決定は早めに行わなければならないことに気づかれると思う。注意しなければならないことは、安易な考えでそれを決定しても就職してからとんでもないことに遭遇することも予想されることだ。

あくまでも、自分の能力・適性を考慮して、会社を選択することが肝心である。

「己を知り、選択対象を知る」ことは絶対的な命題である。

次に、実際の採用試験での学生の体験で、最も多いのが基礎的な学力に欠けていることだ。

語学力に弱いということが本学では一般的になりつつあるが、この弊害はぜひとも排除されなければならない。

就職したら、国際的な経済競争の渦中に投げこまれることになるのだから、せめて一ヵ国語ぐらいはマスターしたいものだ。

これらの轍を踏まえて、来年度の就職活動の大なる飛躍を期待したいものだ。

機械工学科

機械工学科の卒業研究は、学内では、内燃機関関係（吉田衛教授）、工作機械関係（長谷川一郎教授）、水力・自動制御関係（小林和雄教授）、機械工作法関係（日上義雄教授）、精密測定・機械要素関係（長田長慶教授）、金属材料関係（漆原富士夫助教授）応力・塑性加工関係（大川陽康助教授、玉木保講師）、荷役運搬機械及び諸機械関係（小高尊夫講師、鈴木昭講師）に大別され、学外には金属材料技技研究所、理化学研究所、東大生産技術研究所および埼玉県鋳物機械工業試験所などに委託して行なわれている。

各関係研究室の研究テーマの一例を示すと、スプレーガンの粉霧機構の研究・切削温度の測定法について、絞り機構による流量測定・切削工具の切刃摩耗が削り面に及ぼす影響・完全釣合ピストン機構に関する研究・加工熱処理した軟鋼の機械的性質について・応力塗料に関する研究・スパイラルアップコンベア装置の設計・単能自動機の設計などがあり、学外では熔接に関する研究・表層の圧延効果について・薄板の深絞り加工の研究および流量計の研究などが行われている。

学内での研究作業は、前期には就職試験などが間に入ったため、ペースがだいぶ遅れていたが、夏季休暇中よりピッチがあがり、後期に入ってますます油がのってきた状態である。

学外への勉強に出ている学生も一週間に一度のゼミに参加し、状況を報告している。

電気工学科

卒業研究、たけなわ

電気工学科では、一部を除き後期より卒業研究は開始され、その後日も浅くまだこれと云った報告の資料が集る状況でないが、現在の四年生は三年後期に四一七名程度に分れゼミナールを実施し外国文献の講読より開始し、次第に専門事項に移り、その指導教員の下に各自テーマを決定し卒業研究へと進んだものである。従って電気工学科では三年後期におけるゼミナールの選択がそのまま卒業研究のテーマへと連絡している事になる。

卒業研究を開始して痛感される事は、本学設立後初めての卒業研究とは云え、設備の不足は覆ひ難く一つの実験を始めると不足品が必ずと云ってよい程出る事である又これがための資金も潤沢とは云えないにもかかわらず、教員の指導の下に学生は、半導体応用、アリテイブ回路、医療電子、照明、スライディングコンタクト、パワーエレクトロニックス、回転機応用等多種多様にわたり大体各自一テーマを与へられて熱心に興味をもって実施している。中には装置、測定器の自作も行い又時としては徹夜するに至ることもある。

今後一月下旬に予定されている卒業研究発表会を控へてますます研究に熱が入ることと思はれる。

建築学科

本学科における卒業計画は、項目と指導教員を学生諸君がそれぞれ志望、選択し、それが教室で認められた後に、指導教員の助言を得て研究テーマを決めることになる。左記に項目とその内容、指導教員名および本年度の項目別専攻者数を示す。【　】内は指導教員名

第1項　計画並に基本設計を主とするもの（設計製図並計画書）
【藤岡、三苫、宮坂、高橋】32名

第2項　詳細図を含む実施設計を主とするもの（設計製図）
【藤岡、三苫、宮坂、高橋】16名

第3項　構造設計並に構造論文を主とするもの
【塩原、木村、難波】　0名

第4項　施工並に材料実験を主とするもの
【塩原、木村、難波】4名

第5項　調査、統計等による資料作成を主とするもの（研究報告）
【藤岡、伊藤、塩原、木村、宮坂、西、高橋、難波】10名　計62名

以上のような過程を経てスタートした本学科における最初の卒業計画の現状況を報告すると、計画は各研究室において着々と進められ夏期休暇中も殆んど休まずに頑張った者も多くみられその成果が大いに期待されている。尚、本年10月に建築設備を担当される樋井助教授が新任されたため来年度からは前記5項目の他に設備設計並びに建築設備論文を主とする項目が新に、加わり、より充実した卒業計画になることが予測される。

昭和48年度までの施設計画の展望

先の大学通信誌上で、本年度の施設計画の大要は述べられたが、十月末現在、工事は予定通り進行しつつあり本年度三月末までに全計画が完成する見通しが確実となった。また、かねがね学生諸君から強い要望のあった憩いの場所と学内環境の整備については、昨年末から建設委員会で検討されてきたが、その憩いの場所第二号が体育館並びに食堂を前庭として、また、環境整備でも延一、二〇Mに及ぶ学内主要道路の測溝付道路舗装工事として、いずれもその歩を進めることができた。

これらの事は、今後において、更に努力を傾注して行く。

ここでは、来年度から昭和四十八年度までの施設計画の展望を述べてみる。建設委員会が二、三年のうちに完成させたいと希望している施設は、階段教室棟、図書館機械実験棟二棟、電気実験棟六棟建築製図棟、残り一棟などだ。

これらの施設の建設順序や仕様等については、現在検討中なので詳しくは発表できないが、大体の順序は次の通りだ。

46年度　階段教室棟・電気実験棟（二棟）・47年度　図書館・建築製図棟　47年度末～48年度　機械実験棟（二棟）・電気実験棟（四棟）これらは予定なので、順序等の変更や前記以外の施設とふり代わることもあり得る。

こうして本学の施設計画は、一応まとまりをみることになるが、施設と共に重要なのは、内容設備であるので、本学でも設備拡充に向けて努力をして行く。

なお、本年度の場合、私学振興財団の設立等の影響のため、文部省の教育設備助成関係の事務手続きがひどく遅れ、本学も対象設備を購入することができず困っている。

設備によっては本年度中の納品が不可能となる場合も生じてきたので、納期のかかるものについては、文部省に対し、事前の許可を求め早急に発注する考えだ。

行事予定

11月21日　開学式
23日～26日　大学祭
12月19日　冬季休暇開始
1月9日　冬季休暇終了
11日　授業再開
20日　卒業計画提出日
2月2日　休講
3日～13日　期末試験
16日～18日　第一次入学選抜
27日学年末試験成績発表（含卒業計画）

体育施設完成にことよせて

今度、第三種公認グランド（八コース）、体育館、武道場、球技場が完成された。

これは、私たちが念願していたことだけに、これに過ぐる喜びはなかろう。新設の本学に、これらの体育施設が実現したことは、意義深いものである。

文部省では、国民体育向上のため民間施設拡充に、スポーツ教室等を育てている。一方、文部省や日本体育協会では、社会体育の振興に意欲を燃やして、学校の施設は支障のない限り、民間に貸与せよと言っている。

これは、裏を返せば、日本の社会体育が諸外国に比較していかに劣っているかを物語るものだ。

戦後、日本経済の驚異的発展は、国民総生産で世界第二位となって表われているが、その過程で多くの〝ヒズミ〟を残してきた。

なかでも大きな〝ヒズミ〟は、国民健康の破壊と体力の弱体化である。体格はよいが体力がない。

昭和四十二年、文部省が発表したところによると、京大生は千人に対して五〇〇人が健康でなく、東大生は千人に対して一五〇人が神経異常者である。

文部省の西田審議官は、「大学生の身体の弱い者は、大学教育を受ける資格がない。」といっている。もちろん、大学は、学生の健康の保持・増進のため、保健体育に重点をおいている。

体力を構成する要素は、いろいろあるが、なかでも特に重要なものは、筋力・持久力・敏しょう性の三つであるといわれる。

人間の身体は二十五歳を頂点として老化が始まる。

まず、歩け、正しい姿勢、正しい歩行は筋肉の七〇%を使用し、内臓器官の強化に役立つ。

常に、張りつめていれば、身体に迫力が出ると同じように、体力のある人は身体に迫力がある。

長い年月に蓄積された体力は年をとって底力を見せる。

学生諸君もこの施設を充分利用して、自己の健康維持に努力してもらいたい。せめて、一日一回位トラックを一・二周走って、血液循環及び内臓器官を活発にし、新陳代謝を促すべきだ。

人間の身体は刺激を与えなければ、どんどん退化して行く。

これからの社会にあっては、自分の健康は、すこぶる健康であらねばならない。

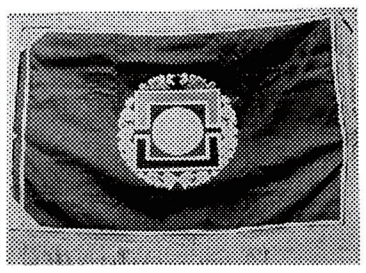
すなわち、心身とも健康であること。学校での健康、家庭での健康、社会での健康、これをよく認識すべきだ。栄養を摂り、運動して始めて本当の健康が保てる。平均寿命は伸びたが、その間の健康維持をしなければならない。

最後に、学生諸君！

この体育施設を、自分の修練の場と思い、教室と考え、汚したり壊したりしないように、出来るなら、私たちの手で整備、管理するぐらいの心構えで、伸び伸びと楽しんでもらいたい。

（市川　直晴教授）

校旗と校歌、制定さる



かねて、校歌制定委員会（委員長伊藤通畦教授）が中心となって制定運備を進めて来た校歌がここに決定の運びとなった。校歌制定の過程については、創刊号でも中間報告を行ったが、昨年、学生代表を含む制度委員会で、全教職員、学生から広く募集、九月二十日締切り、応募総数十三編につき数回の会議を開き検討した結果、四選の佳作をあげるに止まった。

その後、会議を重ね、応募者の目的とする点を昇華し、全職員、学生の声を結集した校歌を詩人神保光太郎氏に依頼することになった。神保氏は浦和在住のわが国詩壇の第一人者で、四季同人代表、地元の詩話会、文芸懇談会の会長等を重任されており、多数の著作がある。

神保氏は教職員、学生と何回か話合われ、また、大学の環境、カリキュラム等まで調べられた上、作詩に当られた。氏との懇談に参加した人達でその情熱に感銘を受けたものは多かろう。作詩は七月終了したが、新しい理念と構想の大学に学ぶ学生が、美しい自然を愛し、希望をもって歩んで行くべき姿が、高らかに歌われている。

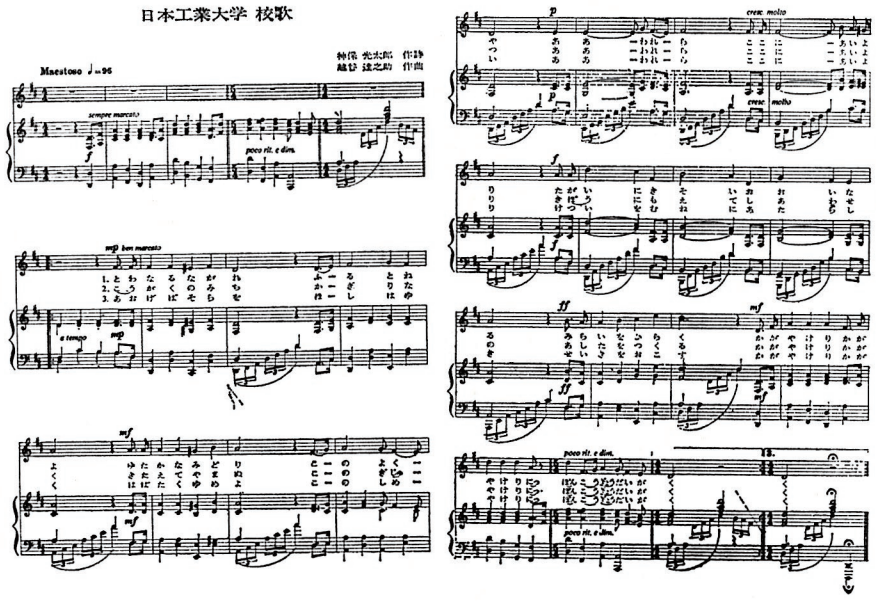
七月から作曲に入ったが、作曲の担当は、「啄木を歌える」等の作曲で有名な越谷達之助氏（青山学院大教授）。荘重な力強さのなかにも親しみをもつこの曲はわが国校歌中の名曲として広く歌われることであろう。

校歌の発表は神谷、越谷両氏の他、歌手の奥田良三氏・リーダーターフェル合唱団等の参加を得て十一月二十日午後一時三〇分より体育館において行なわれる。

本年四月校旗が決定をみ、学園のモットーである誠実、明朗勤勉を示した校章のまわりには、梅の花が配されている。梅の花は学園の花である。なおスクールカラーはエンジ、校旗のデザインは画家の米田三男六介氏。

日本工業大学　校歌

神保光太郎　作詩
越谷達之助　作曲



鶴見君（建築2年）帰国

アメリカでのYWCAキャンプを終えて

私が最初にアメリカ大陸の地を踏んだ所はロス・アンゼルスである。空港の廊下をおりて、出入口から見たロスの景色はすばらしいもので、これがアメリカン・カラーかと感じるほど美しかった。

私はアメリカに行くのに、格別英語の知識を頭につめていったわけではないから、最初の頃は、会話のスピードについて行けず、随分、面くらったものだ。

文字や会話で他国語を使っても実際的な感覚にフイットしない、という事実がある。

アメリカ人夫妻の主催するスキヤキパーティに招かれた時のこと。何人かが集まって写真を撮っていた。全員の女性を写そうとしていた時、〝オールガールズ〟と私がいった。すると、数人の女性がその場から退ぞいてしまったので、〝どうしたのだ〟と聞くと、彼女たちがいうことには、〝私はまだ若い〟、その意味がわからず、問いつめてみたら、私の発音が〝オールドガールズ〟に響いたらしいのである。結局、〝オール〟が〝オー〟で、〝アールド〟が〝オール〟に聞こえるのだ、ということを知った。

ロスを出て、YMCAのサマーキャンプ地であるコロラドに行った。ここに集まった学生の多くはアメリカ人で、中には私みたいに他国から来ている者もいた。

その彼らがホールで雑談をしていたが、それぞれの母国語で話すので、英語とて満足にわからない私には、全くチンプンカンプン。

しかし、リーダー格の者が、黒板にテーマを書き、それを見ながら英語で話し合う時、今まで全く意志の疎通がなかったのに、ただ英語という共通語を媒介として、意志の疎通があった。この時は、英語のすばらしさを痛感した。

コロラドナショナルパークにて

アメリカ各地を回るため、アルバイトをした。大工仕事からゴミ屋まで、多くの力仕事をやった。

その中でも印象にあるのが、ゴミ屋の仕事。アメリカの安い食堂に入ると、プラスチックのスプーン、フォークに紙コップ、紙の皿等々。一度使えば、後はポイと捨てる、それを回収するのがゴミ屋の役目。アメリカ人はよく物を捨てる。ちょっと破けた衣類、少しいたんだ食物。ゴミ屋のアルバイトをして、衣類等で助かったこともある。

アメリカ人はあまり物事を深く考えようとはしないように、私には思われた。しかし、アメリカ人の陽気さ、明朗さは何とも羨ましい限りである。

これが私の見たまま、感じたままである。

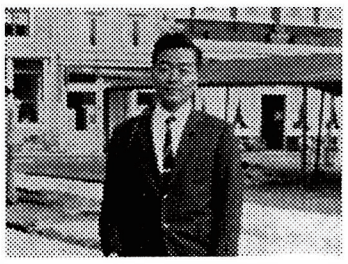
自分が社会人となった時、今一度、じっくりとアメリカを観察してみたいと思っている。

ただ残念なことは、紙面の関係で、これ以上の量を報告できないことである。したがって、前述した事がらは、私のYMCAのキャンプ生活における数ヶ月間のほんのわずかな日々に起きた出来事である。

最後に、今にして思えば、恐しかった、素敵な経験をしたアメリカでのキャンプ生活を許し、協力してくれた両親、姉に心から感謝したい。

ヨーロッパの地場産業

竹内淳彦助教授（工業地理学）



昭和44年の太平洋学術会議の折に、たまたま日本研究のために在京し、「ドイツの都市と日本の都市との比較研究」について発表したボーフム大学のシェラー教授と機会を得た。そのなかから特に印象を強くした、オーストリアの地場産業を中心として、調査結果を報告してみよう。

× × ×

ライン川がアルプスを流れ出てボーデン湖に注ぐ一帯に、オーストリアの最西端のフォーラルベルグ州がある。人口二〇万人余りのこの国最小の州は、スイス・リヒテンシュタイン、それに西ドイツに境を接しており、日常生活においても、これらの国々との関係が深い地方である。すなわち、全就業者の約一〇%が二三の道路と三つの鉄道を利用して三つの国々に通勤しており、現在、一二〇台の通勤バスが運行している。

これは、オーストリアの他の地域との結びつきよりも、大きく主要な外貨獲得資金源となっている。それどころか、人々は、スイスへコーヒーやタバコを求めて国境を越え行き、逆に、この国にはバターや肉を買いにスイス人がやってくる。まさに、国境を越えたショッピングが行なわれている。

このフォーラルベルグ州の北部ライン川をはさんでスイスと接するところにルステナウという村がある。一見、静かな農村景観を示すこの村は、実はほとんど村をあげてステッケライ（刺繍）を生産する繊維工業の村である。

このラインに沿った一帯は、一九世紀の初頭、ナポレオンによって均分相続が行なわれた地域である。もともとアルプスと異なり、穀物生産を中心としていたこの地域の農家は、所有地の急減により生活は貧困化し、専業農家は成り立ちにくくなった。ここに、ステッケライ生産が副業的形態をとりながら、この地方で急速な発展をみた主原因がある。

特に、一九世紀末、自動機械が導入されるや、専業農家は急速に減少し、かつての耕地は牧草地となり、さらに草地と化している。

シフリーマシンによる工場的経営はルステナウなどライン沿いに集まり、ドイツ寄りの谷間の村々に手工業形態をとりながら分散する鎖結びレースの生産と性格を異にしている。ルステナウ村の中央部に、美しい花畑に囲まれて、代表的なファブリッケの一つが建っている。この工場は自ら生産するばかりではなく、紋紙を約数十戸の下請に提供し、自社製品のかなりの部分を生産させており、製造卸ということができる。

このような紋紙を提供しているファブリッケは村内に一四あり、下請の数は約一千世帯のぼる。

これら下請は、機械一台が一〇万マルクと高価なため、かつての畜舎や飼料倉庫を改造した作業場を利用し、一家族従で月収約三〇万円を稼いでいる。

このような工場と下請との結合関係や労働形態は、わが国の北陸地方の織物工業や各地の地場産業の場合と酷似している。

このような地域的産業の存在は今日まで全く明らかにされた事がなく、マイスターの存在を工業発展の原動力と評価しているEECのゲベルベ研究所（中小企業に関する唯一の国際的研究中枢）の莫大な報告書の中にも、靴や家具など都市的なものが分析されているだけで、農村の繊維などは扱われていない。

また、雄大な氷河地形を背景に、のどかに草を食むシンメンタール種の牛がつける、さまざまなクーグロッケは、ブレンネル峠のヨーロッパ橋から旧道を少し進んだフルプメス村で、約五〇〇人の人々により手工業形態で生産されている。

これまでの経済史上、「特殊日本的」などといわれ、ヨーロッパにはないとされていた農村の地場産業が、日本と全く同一の型態でドイツやスイスにも多くみられることは大きな発見であり、従来の定説を大きく修正することができた。これは、〝世界の工場〟といわれるイギリスの研究で、全ヨーロッパを代表させてしまったこの誤りであり、また、大陸諸国の研究対象となることがなかった点に大きな原因があるといえよう。

次に、労働力不足はヨーロッパ産業の大きな問題となっている。

前述のオーラルベルグ州では、多くの労働力を隣国に吸収されてしまうため、チェコ・ユーゴ・イタリアなどから、ステッケライの労働力を求めている。

× × ×

以上は、ほんの一例であるが、ヨーロッパの各地には、それぞれの風土、地域条件を反映してさまざまの経済生活が営まれている。

生活が違えば、考え方も違う点が多い。今後はイギリスをもって、ヨーロッパをすべて律するの愚をすて、もっと新鮮な目で各地域の風土と産業の探究を続ける必要があると考えている。

（写真はアルクメールのチーズ市にての筆者）

後援会だより

会長挨拶　菊薫る秋を迎え一日も早い完成が待たれた新クラブ棟が完成し、九月十三日理事会の後に理事立合いのもと大学に寄贈致しました事を会員の皆様に御報告申し上げます。

日本工業大学の歴史の一ぐりである開学式が十一月二十一日に挙行され、来春には第一回卒業生を広く産業界に送り出し七年間の一貫教育の成果を問う時と成ります。本会も益々後援活動を通して目的達成に力すべく会員の皆様の一層の御協力と御理解をお願い申し上げます。

本年度の事業　四十五年度の事業は大会決定に従い順調に進行しております、前年来の継続事業であった新クラブ棟も完成し、体育館の周辺の植樹援助事業並びに体育館用幕の寄贈についても進行中であります。学生自治会活動援助費は全額を学生自治会に支出いたしました。

人事

専任教員　10月1日付

〈教養〉
- 教授昇格　市川　直晴助教授
- 教授昇格　吉岡　勝　助教授
- 教授昇格　平林重次郎専任講師

〈建築〉
- 教授昇格　宮坂　修吉助教授
- 助教授新任　楡井　武一（現代芸術研究所、万国博大阪事務所長を歴任）

非常勤講師　10月1日付任用

〈教養〉
- 神崎　巌（早稲田大学助教授）
- 中江　斉（前県立清水工高校長・東京工高嘱託教員）

〈機械〉
- 橋本　昇（橋本特許事務所長）
- 野中　政尚（TAT野中デザイン研究所所長）
- 為広　重雄（労働省中央職業訓練所教授兼訓練部長）
- 押切　芳之押切技術事務所長）

〈建築〉
- 吉中　道夫（吉中建築設計事務所長）

（一面より続く）

京工業高校。

昭和43年11月30日　かねてより工事中のM10・M11・M12・E1・E2・A1の実験棟と学生ホール（食堂）が完工。M10・M11・M12・E1・E2の実験棟はそれぞれ四〇七㎡ずつでA1は四七五㎡。設計施工は東京工業高校。

学生ホールは鉄筋コンクリート造平屋一〇五〇㎡。設計は日本工業大学建築学科、施工は㈱熊谷組。

昭和44年1月25日　日本工業大学校舎第四期工事着工。鉄筋コンクリート造3階建、二六八四・七八㎡。施工は㈱熊谷組。

昭和44年3月31日　日本工業大学校舎第三期工事完工。実験棟M2・M7・E3・E7が完工。M2は二七一㎡、M7・E3・E7はそれぞれ四〇七㎡。設計施工は東京工業高校。

昭和44年5月25日　伊藤武平後援会会長任期満了、辞任。二代会長に菅島文男氏就任。

昭和44年6月23日　全国工業高等学校校長協会寄贈の建物を本学構内に移し、工業教育記念館として新しく発足した。

昭和44年8月25日　E6実験棟完工。施工株式会社巴組鉄工所。二四二㎡。

昭和44年8月30日A3・A4実験棟完工。A3四七五㎡、A4四八六㎡。施工はA3が東京工業高校、A4が㈱巴組鉄工所。昭和44年9月　日本工業大学校舎第四期工事完工。

昭和44年10月15日　E8実験棟完工。四〇七㎡、施工東京工業高校。

昭和45年4月　日本工業大学体育グランド工事着工。四〇〇m公認グランド、仕様約一六〇〇㎡。東武百貨店外商。

昭和45年5月　日本工業大学体育館・武道館、工事着工。

体育館下部鉄筋コンクリート、上部鉄骨造平屋、延三九四㎡、床コンクリート下地デックス、オーテックス仕上。

武道館　鉄骨造平屋、延三六四㎡、床木製および畳敷。

施工株式会社巴組鉄工所。

昭和45年9月13日　学生クラブ棟が後援会より寄贈される。

軽量鉄骨2階建、延二六四㎡、床ビニールタイル張り、外壁野田サイディングボード、建具アルミサッシ。

昭和45年9月25日　M8（自動制御実験棟）着工。四〇二・三三㎡S造平屋。施工㈱巴組鉄工所。

昭和45年10月1日　E9（電気強電実験棟）着工。三九五・八五㎡。施工㈱巴組鉄工所。

昭和45年10月6日　M6（機械精密測定実験棟）着工。五五四、一九㎡。施工、㈱巴組鉄工所。

昭和45年10月26日　M9（機械製図棟）着工。一一八一・四六㎡施工、㈱巴組鉄工所。S造平屋。

教育実習終る

豊沢　登教授（教職）

現場での、悪戦苦闘を物語る実習日誌が、研究室の机上に積み重ねられていく。まもなく、本年度の教育実習が完了する。

ところで、実習の成果や如何に？　このことは、教育実習担当のわれわれは言うに及ばず本学職員の関心事といえよう。実習校は、前号でお知らせしたように、東京・埼玉・千葉・栃木など広範囲で多数にわたっているが、過日行われた「教育実習研究懇談会」の模様をお伝えして、その報告にかえたい。

懇談会は、七月十六日、午後五時より東京工業高等学校において開かれた。高校側から、窪田学校長以下、指導教諭十五名、大学側から豊沢教授、長谷川講師等五名が出席した。懇談は、豊沢教授の挨拶にはじまり、建築・機械・電気各科の指導教官の感想、そして出席者全員の自由な意見の交換といった形で進められた。

懇談の内容の中には、実習生の具体例さえ提供され、実習活動の姿が浮き彫りにされた。A君は、高校時代は不成績であったが、努力して身につけた計算尺を使って熱心に指導して成果をあげ、B君は、シンクロシートを利用しての授業に真剣にとり組んだ。C君は、高校時代に比較してマナーが大変良くなった等々、真剣に実習に立ち向った、次元の高い話し合いが続けられたのである。

東工学園において、実習生たちは、それぞれ専門の担当教官とマンツーマン（man to man）方式で、授業・ホームルーム・教職事務など教育の全領域の指導をうけていた。先生方の多忙を極める日常の教育活動を考える時、多数の実習生をかかえての、高校側の熱意に全く頭の下がる思いである。

ここで、各担当教官の、実習生に対する感想を列挙してみると、次の通りである。

まじめである。身だしなみが良い（服装・頭髪）。勤務状態が良好である。実習生に対して意欲的である。言葉が速すぎる（授業時）。誤字が目立つ（板書、日誌）H・R時の質問（社会科）に弱い。

これらの批評の中には、教育技術の未熟さが指摘されているが、これらは、教師生活をとおして高められていくものである。何はともあれ、教育への情熱・まじめさ・謙虚な態度といった教師の基本的な構えはじゅうぶんに看取された。思うに、「教えることは学ぶこと」なのである。実習生諸君は限られた時間の中で、精一杯頑張り通した。

その実り多い現場での体験を、残された大学生活に投影してもらいたいものである。本年度の実習生は、日本工業大学にとっては、第一回の実習生にあたる。これに続く後輩に期待して、筆をおく。

木村　岩蔵（教養）七月十八日、病死

松村　保則（建築三年）十月十四日、午前九時ごろ国道四号線の杉戸町付近で、交通事故死。

●本学への通学

上野から40分、新宿から60分、銀座から60分。地下鉄日比谷線乗入れあり、北千住から28分（快速）で到着、都内はもちろん三多摩地区、川崎市、横浜市など関東一円から比較的楽に通学可能。

●日本工業大学入学についてのお問合わせは左記へお願いします。

埼玉県南埼玉郡宮代町（〒345）
日本工業大学工学部入試係
電話〇四八〇三(2)三一五一（代表）
または
東京都目黒区駒場一―三五―三二（〒153）
東工学園日本工業大学入試係
電話（四六七）二一三一

『自由』ゼミに参加しよう

私たちは、私たち自身だろうか？

例えば、車への欲求というものを考えてみよう。あざやかに車を走らせる男のかたわらに、女の子が坐っていて、その黒髪が明るい陽射をうけて輝き流れる。そんなシィーンを私たちの誰かが、「カッコイイ」と思ったとしよう。

そのように疾駆する車を欲しいと思う青年たちは多い。しかし本来自動車は、より速く走りたいという動物的な欲求と、物を運ぶ仕事をより少ない労力でやりたいという実用的な必要から発明改良されて来たものだ。現在の私たちのあるものの車への欲求は、この素朴な速さへのあこがれとか、実用的な効用とはかけ離れて、いい「カッコ」をしてみたいという欲求をみたすひとつの方法にすぎなくなった。何故そう変って来たのかこの間に答えるには、現代文明の種々相に亘る広大な歴史的分析すら必要となることだろう。しかしその中のひとつの要求、自動車産業の私的私益の追求という側面をとりあげてみると、素朴な根源的な欲求とは別の、大量生産に見合う需要の拡大を討るために、巧妙に作りあげられた欲求であるかのように私たちを駆りたてていると考えて行くことができるだろう。

とすると、私たち自身の欲求とは何だろうか？　否、私たちが欲しいと思う事柄だけでなく物の考え方、感じ方すらも、私たち自身とは別の何かあるものによって、鋳型にはめられているかも知れない。一般的に言い換えれば、歴史的、社会的偏見によって私たちの感覚や思考、さらには生そのものすら束縛されているのかも知れない。もうひとつ、こんな思想をしてみることは無意味だろうか。兇悪なインディアンの襲撃から開拓者の生命を守る正義の味方騎兵隊やディービー・クロケットたちも視点を変えれば、土の薫りに満ちた素朴な生活を破壊するためにやってきた貪欲な侵入者たちの相貌を帯びてくる。

さらに、現在、激しく燃え続けている黒人問題をつけ加えると、撃ち殺され駆逐されて行ったジェロニモたちと、靴の下で血を流していた　ナット・ターナーたちがある歴史的な展望のもとで連合し共通の敵を明確に認識していたら今あるアメリカが存在していたろうか。彼らが連合しなかったのは一種の歴史的・社会的な遍見によって、彼らの感覚的・思索的空間が狭く、閉じられていたからだと言えないだろうか。

偏見というものは恐しい。

私たち自身、現代史的な偏見にとらえられているとしたら、その鋳型を突き破り、より広い感覚的・思索的空間に、私たちの生を解放すること、つまり、人間的な自由を取り戻すことによって私たちは私たち自身でありえよう。私たちの偏見は、私たちの私的・社会的生活の総体によって形づくられている。

特に、私たちの映像文化は私たちの鋳型にはめようと欲している者たちの強力な武器である。

私たちは何によってそれに対抗し、自由を確保するのか。

その一つの手段が「言葉」なのだと思う。言葉には、時空を超え真実を伝える力がある。

しかし、私たちが偏見の中で惰眠をむさぼる限り、その力は私たちを助けてくれないのであって、私たちの自ら、偏見にとらえられているのではないかという懸念を抱き、言葉の中の真実を掘りおこしていかなければならない。

書物を読むということは、自身自身を偏見から解放し、私たちが私たちであり得るための自由な空間を切り拓くひとつの行為であると考えられる。

一冊の本を読みながら議論し、「自由」を取り戻していくためのゼミナールをやってみませんか。

次に挙げる方々がチューターを申し出ています。参加してみたいと思う人は、連絡係の川副、もしくは各チューターに直接申し込んでください。

木村哲三・「悉の女歌手」イヨネスコ
小林俊雄・フォトラン言語・計算の理論・パターン認識等
西田英郎・「人間機械論」
清島達郎・想像力の問題
鈴木一良・「物理学の歴史」
竹内淳彦・「地域と人間」
その他希望によりみつくろう。

ネパール・行

建築学科主任教授　藤岡通夫

昨年の暮から正月にかけて、ネパール・カンボジヤを駆け歩いてきた。ネパールはカンボジア盆地だけで、約一週間の間に、いろいろの建築を見てきた。

一九五〇年、ネパールは、長い間のラナ将軍体制が崩壊し、急に近代化の傾向をたどり、首都カトマンズもわずかであるが、変貌をはじめている。

しかし、カトマンズのすぐ隣りに接しているパタンという町などは、中世以来の古い形式を今日までそのまま残しており世界でも珍らしい都市とされている。だが、カトマンズに見られるように、都市近代化の波はもう隣りまで押寄せている。

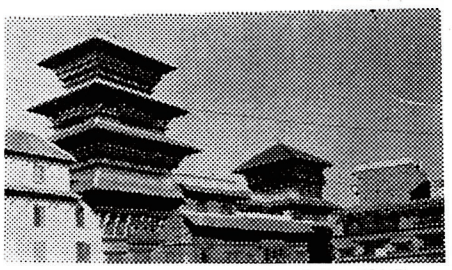
パタンのような町がいつまで今の姿を保って行けるかは疑問であるが、この古い町をどう保存し、どう開発して行くかは今後の大きな問題であろう。

日本も保存と開発とのいろいろの問題に悩まされているが、ネパールでも近い将来に必ず起ってくる問題である。ことに、ネパールはまだこれといった産業もなく観光は外貨獲得の重要な資源となるだろうから、保存すべきものは充分に手をつくして、保存対策を考えなければならないだろう。

それには、まず、古建築や遺跡の評価がなされなければならないが、まだそれに必要な調査・研究が皆無といった状態である。なにしろ、長いラナ将軍体制の間、ネパールは極端な鎖国政策をとっていたから、外国人による調査はほとんど行われていない。

従って、保存と開発の問題が起っても、何の対策もたてられない段階にある。そこでまず、古建築や遺跡の調査から始めることが目下の急務ということであり、ネパール政府にもその希望があるようで、友人から私に乗り出せという話もあったが、何分にもネパールには行ったこともないし、資料も少ないので、果して何をどう調査してよいものか見当もつかない。

そこで、本格的な調査に乗り出すかどうかの前に、一度下検分をしてみて、決心しようと思ったのが、今回のネパール行の目的である。



カトマンズの王宮と広場

ネパールの南部・インド国境近くには著名な仏教遺跡がある。

しかし、今回は前述した目的があるから、歩いた範囲はカトマンズ盆地のカトマンズ・パタン・バドガオンの三都市に限られた。

この三都市は中世（十三世紀―十八世紀）のマルラ王朝の後半にできたもので、カトマンズ盆地には三人の王がたち、鼎立した。

しかし、その後十八世紀中葉、両方にいたグルカ王のプリティビ・ナラヤン・シャバがこの三王国を攻略、支配したが、その三都市併立時代の形式が、現在なお、残っている。三都市とも町の中央に広場をもっており、その広場に面して王宮が設けられ、広場の中には寺院の塔がたてられている。

広場に面する王宮以外の部分には、高官の家などがあったようだが、現在は一階が改造されて、物売り店となっている所が多い。

王宮は二、三階の建物の屋上に大小の　楼閣　をのせているので、あたかも日本の城の天守閣を見ているような気がする。カトマンズの王宮の大楼閣は、内部が九階となっているから、大規模である。

一般にネパールの建築は、外から見ると、レンガ造りのように見えるが、実は木造にレンガのカーテンウォールを併用したものである。つまり、木造の柱や梁で構築し、柱の間にレンガを積み、柱が外に見えないようにするから、一見レンガ造りのように見えるが、主体は木造である。

屋上の楼閣は純粋の木造で、瓦屋根となっているので、この部分を見ていると、インド建築よりはシナや日本の建築に近い。

外壁には斜めにした格子を入れているところが多いが、それを垂直にしないで、上の方を前方に傾斜させている。王が格子越しに下方を望み見るのに都合よくできているのが、実に面白い。

窓とその周囲には細かな彫刻を施し、黒く塗っているが、このあたりに、ネパール建築の特色が最もよく現われている。

バドガオンの王宮では、三階を全部木のグリルで埋めている。一二階は　窓を小さくして　赤いレンガの外壁を多く見せているので、その調和がまことに美しい。

恐らく、ネパール随一の名建築といえるだろうが、全く無名の建築である。

ネパールの建築でよく紹介されているのは、ボドナート寺とスワヤムブナート寺の二つのストゥパである。ストゥーパとは、申すまでもなくインドに発生し、当初は仏舎利を納めたから、墓の意味であった。ネパールのストゥーパはインドのストゥーパの形式を大きく崩していないが、まんじゅう型の塔身の上にのる平頭という四角な台の四方に眼をかき、鼻の位置に?が打たれてある。この二つの塔は、あたかも家徴のごく、とネパールのことを書いたどの本にも出てくるし、万国博のネパール館にもこの眼玉がつけられていた。

しかし、この眼が何を意味しているのかは、明らかでない。

これらの塔は六世紀頃に建てられたらしいが、現在の塔は後世の改造で、それほど古いと思われないし、インドのものと比べると全くの亜流で、あまりよいものとは言えない。

ネパールにはヒンズー教も入っているので、その寺院が各所に見られるが、この宗教だけはいまだに異教徒を絶対に入れないので、遠方より望見しているより致し方がない。

岐路に立つ科学・技術

機械工学科　玉木保講師

〝公害〟

「人類は果して生き延びることができるのだろうか。」

人間の未来については多くのことが語られた。科学・技術の無限の発展による理想郷と、その反対の核爆発による人類の絶滅。しかし、こうしたことを耳にしても、「自分たちの生きている間は、事の起るはずがない。」と高をくくっていたのが実状である。

だが冒頭の〝公害〟は、それが直接、我々自身の生命を脅かす問題であり、しかも、人類進歩の錦の御旗「科学・技術」によって引き起されただけに、我々を憤然とさせる。そして、改めて「人間とは何か」と自問する。

人間の形成の歴史は、進化論を基礎に、無機的自然（天体的時代）、有機的自然（生物的時代）、人間的自然（社会的時代）の　経過をたどる。人間的自然とは、人間が自然によって生きると共に、全自然を人間的自然に変えてゆくこと、さらには人間が人間的（すなわち、社会的）存在であることだと言われる。そして科学・技術は、自然を人間的自然、人間の為の自然への転化する過程として生じる。この人間的自然の段階の今日、科学・技術の「進歩」の裏側に〝公害〟が存在するのである。

現在、主として取りあげられている〝公害〟は、一口に言って「環境汚染」であり、人間を取り巻く自然、すなわち環境の破壊である大気汚染（バイ煙・有毒ガス・粉ジン・悪臭）、水汚染、騒音・振動及びこれらの要素が複雑にからみ合ったさまざまの環境破壊がそれである。

ところで、人間自身はどうであろうか。ほとんどすべての食物が人体に有害な残留農薬、有毒添加物を含んでいる。有機水銀、カドミウムは人体に蓄積され、遺伝し六〇万年の　昔から　築きあげられた人類の清浄な肉体が一挙に破壊される。都市及び交通機関の野放しの膨張は交通災害の発生と共に人間に　歩くことを　忘れさせ、人体のあらゆる機能を低下させる。人間を人間たらしめる「労働」においても事態は同じである。精神と肉体は相互に作用し合ってその能力を高めてきた。強靭な精神の持主は、又、強靭な肉体の持主である。ところが、今や精神労働と肉体労働は分裂し、肉体労働が不当に軽視され、精神のみの異常に〝発達〟した人間が形成される。現実から遊離した空理空論が横行し、超現実的で刹那的な思想に酔いしれるのもここに起因する。

以上観てきたように、人間を取り巻く環境も、人間そのものも、今や重大な危機にある。現代のこの危機の直接的な原因が政治体制や経済機構にあるにしても、その政治経済の変動の基礎をなすものは科学・技術である。

かって科学、技術の進歩は遅くその　水準も低い　段階にあったため、全体的な立場で科学研究は進められた。ルネッサンスのレオナルド・タ・ヴィンチレは偉大な画家であったばかりでなく、大数学者であり、力学の大家であり、大技術者であったし、物理学の諸法則を発見した。こうした時代には科学・技術は人類進歩に貢献した。

しかし、今日、高度に発展した科学・技術は細分化・専門化を盲目的に拡大し、このことによって、研究者・技術者は本来の目的である、自然の諸法則の発見とその創造的応用を忘れ、単なる生活の手段として無批判な研究を行う傾向を強める。

「人間と地球の存亡にかかわる重大な問題」の提起されている今日、科学・技術に携わる者の責務は重大である。すなわち、科学・技術の無責任な研究開発がこれら人類的、地球的犯罪につながることを自覚し、現実の社会に対する深い洞察と、それに基く研究の設定を行わなくてはならない。たとえ、ルネッサンスの巨人の思考力や情熱、多才、博識には及ばなくとも。

「人間の為の自然へと転化する過程」で生じた科学・技術は社会を構成するすべての人間によって形成される。現代の危機を造り出したのは、単に科学者・技術者のみではなく、我々すべてである。我々の行為は我々から発して我々以外のものに向うのではない。宇宙は閉じた系であるから、結局我々に還ってくる。しかも行為の反作用として、我々自身が人間として形成されそれがまた未来へとつながる。歴史は不可逆過程であり、今日の誤ちは永久に消えることなく未来へと作用し続ける。今日の累積が歴史を形成することを思うとき、今日　の行為　の中にこそ、未来が秘められている。

現代文明の基礎をなす科学・技術を今後、どう進展させるか、すべて我々の手中にある。

編集後記

今回の大学通信は第4号になるわけだが、ちょうど四周年目を迎える開学式にあたる。

紙面の内容は開学式の特集を一面に、今年から新たに始まった就職・卒業研究・教育実習等を他の面に盛込み、紙面の大きさもタブロイド版とした。

さて、各界の要請によって設立をみた本学は、設立当初に比べるとすべての面で規模が大きくなり、一般的な意味での大学らしさを感じさせるまでになった。しかし、内的・質的な充実を企るためには、多くの課題が残されているといえよう。

真理の探究を標榜とし、創造力と豊かな人間性をめざしてきた第一期生が、来春、実社会へ飛び立つ。四年間の学問を結晶させた真価を問われ、現在に至った本学の伝統が輝やくのはこれからだ。この開学式を契機に本学の理想とするところを吟味し、理解して、伝統を築かなければならないだろう。

入試日程

	募集出願期間	試験期日	合格発表日	入学手続締切日
一次	1月11日～2月13日	2月16日～18日	2月23日	3月2日
二次	3月3日～3月16日	3月18日・19日	3月24日	3月31日

出身県別学生数

北海道50名、青森35名、秋田19名
岩手15名、山形26名、福島31名、宮城30名、茨城37名、栃木59名、群馬33名、埼玉157名、千葉76名、東京821名、神奈川76名、山梨22名、新潟32名、長野51名、富山11名、福井3名、石川7名、静岡51名、愛知10名、岐阜5名、京都4名、滋賀1名、奈良2名、兵庫11名、大阪17名、和歌山7名、三重4名、岡山28名、広島14名、山口6名、鳥取8名、島根8名、香川7名、愛媛7名、高知2名、徳島2名、大分1名、佐賀6名、長崎7名、熊本7名、宮崎9名、鹿児島21名、福岡2名、沖縄8名、タイ国3名、香港1名（総計1850名）

学内団体

〈体育会〉ボウリング部、サッカー部、野球部、スキー部、体操競技部、陸上競技部、ワンダーフォーゲル部、剣道部、ヨット部、少林寺拳法部、柔道部、空手道部、アメリカンフットボール部、ゴルフクラブ、ラグビーフットボールクラブ、バレーボール部、射撃部、硬式庭球部、舞踏研究部。

〈文化団体〉放送研究会、聖書研究同好会、写真部、自動車部、金属材料研究会、第三文明研究会、航空部、建築デザイン研究会、ギター研究会、音響工学研究会、学生建築家サロン、第二旅行研究会、英語研究部、モダン・フォークソング部、音楽研究会、現代思想研究会。

富戸海浜寮・赤倉山荘の御利用を

申込は本学本部へ

目黒区駒場1の35の32（467）2131-5

■富戸海浜寮：伊豆半島の東海岸に位置し伊豆の山々を背景に紺碧の海がひろがる。磯釣に海水浴に、ドライブの宿泊所に、みかん狩りにどうぞ

□所在地：静岡県伊東市富戸払海岸　□交通：伊東駅よりバス40分八幡野行き　□宿泊費：1泊2食付650円（学）900円（父）

■赤倉山荘：妙高の山々が雄大にそびえ、高原の風は涼しい。冬には変化にとんだスロープが展開しスキーのメッカとなる。避暑に、登山に、スキーにどうぞ

□所在地：新潟県中頚城郡妙高高原赤倉
□交通：信越線、田口駅下車、バス赤倉温泉
□宿泊費：1泊2食付650円（学）900円（父）